

官僚機構～大蔵官僚とは何か～

E07-0832H 野崎 誠
望月ゼミ 4 年次卒業論

文

序章

第 1 章 崩壊する大蔵省

- 1 節 混乱極める大蔵省
- 2 節 甘かった田谷・中島処分

第 2 章 大蔵官僚になるには

- 1 節 「国家 1 種」試験
- 2 節 大蔵式帝王学
- 3 節 若殿研修

第 3 章 大蔵官僚の憂鬱

- 1 節 頭脳よりも体力
- 2 節 離婚の大蔵省
- 3 節 ノイローゼの影も忍び寄る

第 4 章 気になる官僚の懐

- 1 節 果たして安月給か？
- 2 節 拝見！官僚の住い

第5章 新特権階級を狙う大蔵官僚

- 1 節 華麗なる閥閥
- 2 節 財界にまで進出する大蔵官僚
- 3 節 大蔵官僚版「ねるとんパーティー」

第6章 先進主要国の官僚制

- 1 節 勝てば官軍のアメリカ官僚制
- 2 節 解雇されないファーストレディー
- 3 節 アメリカの清潔な役人達
- 4 節 開かれている官僚機構、閉じられているホワイトハウス
- 5 節 官僚国家フランス
- 6 節 エリートを生む制度

第7章 望まれる意識改革

- 1 節 22歳の悲惨な結末
- 2 節 高級ブランドとして的高级官僚

序章

かつては「官庁の中の官庁」といわれ、絶大な権力を誇った「大蔵省」が今、急速に地盤沈下を起こしている。

というのも、95年1月以降、噴出した「イ・アイ・イ・グループ」の高橋と「元IBM」の政界担当、窪田による、田谷・中島両大蔵官僚に対する過剰接待疑惑に始まり、彼らの不正蓄財疑惑や金品の贈与など、かつてはみられなかった類の行き過ぎた犯罪行為が明るみになった。

そして、あろうことか、極め付けは、まさかの「ノーパン・シャブシャブ」接待であった。確かに、大蔵官僚と各金融機関のMOF担は、お互いに情報の交換と称して関係が親密化している事は公然の秘密であったが、かつて大蔵官僚がタカるように自ら相手に接待を要求したり、金融界における審判たる金融検査官が他行の経営情報を、そことは異なった金融機関に流す事などはなかった。

そして、彼らの失策は、日本発世界金融恐慌の悪夢を現実のものにさせかけた。

金融のプロの背筋を凍らせたその瞬間は、大蔵省による金融失策の積み重ねの重さが臨界点に達しそうになって起きた。

贈収賄容疑で、東京地検特捜部は大蔵省に前代未聞の家宅捜索を行い金融機関による大蔵官僚の接待疑惑がクローズアップされているが、金融恐慌を起こしていたら大蔵省の罪はその比ではない。

今、大蔵省は未曾有の危機に見舞われており、国内はもとより、国外からも批判されている大蔵省・大蔵官僚の退廃の原因は一体何なのか、また、その温床となっているものは何なのか、その実態と背景に迫ってみたいと思う。

第1章 崩壊する大蔵省

1 - 1 混乱極める大蔵省

「何故我々だけなんですか。不公平じゃないか！」

若手職員の剣幕に、銀行局幹部は返す言葉が無かったという。

検査官2人の逮捕と本省への強制捜査ということで、批判再燃への危機感を強めた大臣官房秘書課は98年1月末、直ちに「接待」に関する緊急調査に乗り出した。

過去5年間にさかのぼって受けた接待の日時、場所、省内の同席者、費用負担の方法など「できるだけ具体的に調査票に記入し、提出する事」が義務づけられた。

しかし、調査対象が問題だったのである。

大臣官房秘書課が当初考えた案では、「過去5年間に金融関連部局に課長補佐以上の管理者として在籍し、かつ、現在も在籍中の者」だけが対象になっていたのだ。

これでは、バブル期に銀行、証券局で接待を受けていても現在が主計局在籍なら調査は免れる。

冒頭の抗議は、こうした不公平に金融関連部局の怒りが爆発したのだった。

さすがに省内各所で批判が噴き出したため、その後、対象は「過去5年間に金融関連部局に管理者として在籍した者」へと広がり、さらにそれ以前の在籍者についても調査票が配られた。

それでも4階（金融関連部局）と接点が無ければ、調査や処分の対象となる事はない。

つまり、銀行と名が付けば、たとえ相手が開銀であっても報告しなければならない。

でも、公社・公団の接待なら、どんなに派手な接待を受けていても4階に配属されていなければ大丈夫というダブルスタンダードなのだ。

修復できない「断層」はキャリアとノンキャリアの間にも存在していた。

東京地検に逮捕された宮川宏一金融証券検査官室長（懲戒免職）と、官舎で自殺した大月洋一金融取引管理官は、それぞれ金融の検査・行政部門における「ノンキャリアのリーダー

一格」であった。

ノンキャリアから言わせれば、確かに我々も接待を受けてきたけど、キャリアはそれを上回る接待を受けていたのに、なぜノンキャリアだけなのかという思いは強いだろう。

ノンキャリアはキャリアに怒りをぶつけ、金融関連部局のキャリアは財務部局のキャリアに不満を漏らし、「相互不信」はあまりに深刻である。

1 - 2 甘かった田谷、中島処分

1995年3月、東京協和・安全両信組の破綻処理に絡んで、田谷廣明東京税関長（当時）の接待疑惑が国会で取り上げられた。

信組理事長のジェット機で香港旅行していたというものだった。

43年に入省の田谷廣明氏は当時、万人が認める将来の次官候補で、斎藤次郎次官（同）からの信頼もことの他厚かった。

これが影響したのか、斎藤次官と小村官房長は、決然たる対応が出来なかった。

国家公務員法に基づく処分ではなくて、内規による「訓告」処分であった。

田谷氏と並んで、41年組の次官候補、中島義雄主計局次長も同時に処分されたが、理由は「2回のゴルフと数回の料亭接待」としか説明されなかった。

接待はあれだけだったのか、処分は適切だったのか、省内に詳しい説明はなく、ただ次官候補を守りたいだけであった。

更に同年7月、今度は中島氏に不正蓄財疑惑が浮上し、辞職届を提出。

篠沢恭助次官（同）らが監督不十分で処分されたが、中島氏については「退職した人を調査し、処分する事は出来ない」（秘書課）という理由でお咎めなし。

その後発覚した、巨額の申告漏れに対しても、所得税法違反の告発はなかった。

官房付で長く謹慎していた田谷氏も「依願退職」の形で大蔵省を去り、真相は闇の中に葬り去られた。

大手生保からの携帯電話のタダ借り、石油卸商からの絵画寄贈など、その後も幾多の疑問が浮上したが、大蔵省の調査や処分は一貫して手ぬるかった。

田谷・中島問題という「前例」を超える訳にはいかなかったのだ。

「社会的に疑惑を招き、公務員の信頼を損なう行為だったが、接待によって検査に影響が及ぼされた事はない。」

97年7月、第一勧銀による接待問題で職員2人を処分した時、秘書課は再びこう説明し、それ以上の捜査は行わないと言明した。

東京地検が、大蔵省の自浄能力に疑問を持ち接待の全容解明に動き出したのは、この「甘すぎる対応」がキッカケの一つだったといわれている。

調査も処分も原則一回限り、出来れば内規による穏便な処置にとどめ報道されている以上の事実は追求・公表しない....これが不祥事に対する大蔵省の一貫した対処方法である。検査官疑惑の時、あたかも全容を解明したこの様に振る舞い、調査打ち切りを宣言したのが最大のミスだった。

ああいう時は、更に捜査を継続し、必要に応じて追加処分すると言っておくのが常識なのに、結局、あの一言で大蔵省はマスコミからも捜査当局からも疑惑の目で見られる事になった。

第2章 大蔵官僚になるには

2 - 1 「国家1種試験」

“官僚の中の官僚”といわれる大蔵官僚達は、どのようにして選ばれ、どのような教育を受けて、日本の権力構造の中核を担うパワー・エリートにしたてられていくのだろうか。まず、大蔵官僚への道は、「東大法・優2ヶタ」の東大至上主義を満たす事から始まる。そして、50倍近い競争率の「国家1種」試験を受験し、合格したら、次は官庁訪問である。

当然、官庁によって人気のバラつきがあるが、大蔵省の場合、はっきりいって完全な買手市場である。

というのも、大蔵省を志望する合格者（キャリア）が多いからだ。

採用の際のポイントはいくつかあるが、何とんでも、「国家1種」試験の成績が上位にある事....どれくらい上位かという公式的には、1,000人あまりの「国家1種」合格者のうち「99番以内」に入っている事とされている。

しかし、昔は2ヶタ（10番以下）だと先輩や同期生に軽蔑されたものだというから、や

はり大蔵の主流を歩むつもりだったら、5番以内が望ましいのに違いない。

本省幹部コースは毎年25名以内の採用だから、せいぜい50番くらいまでが妥当な線であろう。

当然「国家1種」試験は受験するとして、この他のルートとして、もともと大蔵省は東大法学部の牙城ともいえる官庁であるため、母校の東大ゼミの教授とは師弟の仲である。

ゼミの教授に優秀な学生を紹介してもらい、その先輩にあたる大蔵官僚が口説きにかかるというものである。

大蔵青田狩りの2つめの方法として、既に伝統的ともいわれる東大の運動部からのルートである。

特に東大ボート部は大蔵官僚予備軍といわれる所で、もはや“指定コース”になっている。ボート部に限らず最近の大蔵省新採用者は東大運動部からの引き抜きが目立っているのが特徴だ。

しかし、学生の中には他省庁と二股をかけている者もいるが、どうしても採りたい人物であれば、電話で確認したり、出身高校の先輩や郷土の先輩を差し向けて“一本釣り”することもあらしい。

又、電話で呼び出して、喫茶店でコーヒーを飲んだり、時には課長以上の“大物”が夕食を共にしたりするというルール違反もやっている。

極め付けは、バブル華やかかりし頃、通産省や日銀や都銀に採られない様に、これは！と思う人材を大蔵省地下にある「ホテル大蔵」にカンヅメにしていたという噂もある。

かくして、次代の“大蔵王朝”の支配者として選ばれた一昨年度、昨年度の内定者は以下の通りである。

いうなれば、我々国民は、一部の東大出身者（中でも法学部OB）によって国家をリードされ統治されていると言っても過言ではない。

平成8年度 種大蔵省採用者一覧

局	課	氏名	大学学部	高校
大臣官房	秘書課	端本 秀夫	東大法	私立ラ・サール
	文書課	坂本 成範	東大法	東京学芸大付属
	文書課	田部 真史	東大法	県立旭丘
	文書課	吉田 英一郎	一橋経	都立富士
	調査企画課	廣川 斎	東大経	私立洛星

主計局	総務課	西村 聞多	東大法	私立灘
	総務課	原田 一寿	東大法	私立麻布
	総務課	福田 誠	京大経	県立彦根東
主税局	調査課	金子 明彦	東大法	県立旭丘
	調査課	佐藤 大	早大法	県立酒田東
関税局	企画課	田中 耕太郎	東大法	私立巣鴨
	国際機関課	中田 和幸	東大法	私立栄光学園
理財局	総務課	波戸 本尚	東大法	大阪教育大付属池田
	資金第一課	西方 健一	東大法	筑波大学付属
証券局	総務課	芹生 太郎	京大院経	県立厚木
	証券市場課	池田 賢史	東大法	県立川越
銀行局	総務課	小澤 研也	東大法	私立開成
	中小金融課	西野 健	東大院工	私立ラ・サール
	調査課	有利 浩一郎	東大法	県立浦和
	調査課	坂口 和家男	京大法	府立北野
国際金融局	総務課	陣田 直也	東大法	私立高田
	国際機構課	野村 宗成	東大法	私立大阪星光学院

総合 東大16(73%) その他6
22 <うち法15(68%)>
>
私大たったの1名!

平成9年度 種大蔵省採用内定者

氏名	区分	大学学部	高校
当表登	法律	東大法	私立広島学院
	経済	慶大経	県立土浦第一
	法律	東大院農	私立甲陽学院
	経済	京大理	都立国立
	法律	東大法	私立桐朋
	経済	東大法	県立光陵
	経済	横市大商一橋院経	私立国学院
	経済	東大経	県立安曇

法律	東大法	私立久留米大付属
法律	東大法	県立千葉
法律	早大政経	県立高崎
法律	東大法	私立桐陰
法律	東大法	国立筑波大付属駒場
経済	早大法	私立ラ・サール
行政	東大法	私立暁星
法律	東大法	私立灘
法律	東大法	私立成蹊
法律	東大法	私立麻布
経済	東大経	私立岡山白陵

総合 その他 5 19	東大 14 (74%) うち法 10 (53%) 私大 2名	そ
----------------------------	---	----------

2 - 2 大蔵式帝王学

では、その若きエリート達は、大蔵省に入って、どのような帝王学を学びながら、日本のエスタブリッシュメントになっていくのであろうか。

まず気になるのは、“一本釣り”で青田狩りされた成績優秀者達のコースであるが、課長補佐になるまでの約10年間くらいは、横一列の自由競争で、どの部署が特別いいと決まっている訳ではない。

だが、敢えて言うならトップクラスは、入省時、大臣官房の秘書課や文書課、あるいは主計局総務課といった省内でも、“花形部署”といわれる所に就く事がある。

新大蔵官僚になると、“合宿研修”が待ち構えており、毎年、6月の中旬、9日間に渡って神奈川県葉山にある横浜銀行の葉山研修センターで行われる。

これは同銀行元頭取の吉国二郎（元事務次官）が大蔵OBであることから、数年前から定着している。

研修目的は「大蔵官僚としての心得と同期の連帯感を養うため」（秘書課）というものだが、ここでおおざっぱな理論研修を受ける。

昔は、理論研修の他に早朝マラソンをやったり、近くの寺で座禅を組んだりしたらしい。

そして、夜は夜で、先輩や同僚達と酒を酌み交わし、討論したり、麻雀したりする。

この酒を酌み交わしながらの談笑にこそ、大蔵省哲学があるのだという。

この研修の本当のネタは、大蔵官僚としての生活態度であり、プライベートな事まで教える。

接待の時の酒の飲み方、政治家との付き合い方、あるいは女性との交際の仕方などを先輩達がりげなく自分の体験を通してさりげなく教えるのである。

下らない事でマスコミの餌食にされては、大蔵省の機構に関わるのだという事を。

察するに、新大蔵官僚達は、この研修で自分達が一般国民を統治する側の人種になった事を教えられるのである。

これが済むと大蔵1年生は、本省のそれぞれの部署に就き、いよいよ本格的な実践教育を受ける事にある。

大蔵省に新採用者向けのパロディがある。

浜田卓二郎 OB にしごかれた49年組みが、こうはいいのために作った「大蔵省求人案内」である。

<職種> 電話番、文書配送、浄書及複写機操作、帳合、電卓活用、図表作成等

<条件> 夜に強い人

<待遇> 社保、豪華独身寮完備、絢爛大食堂、給与少々安、賞与二回、深夜帰宅時車使用可

宿泊施設社内完備

<休日> 日曜祭日不運時出勤、幸運時土休可

<他> 全先輩柔和、室内遊戯飲酒機会多

<待遇>の項に「昇進新幹線並エスカレーター有り、退職金多額、天下り付き」というのが抜けているようだが、なかなかの傑作であり、<職種>にいたっては、大蔵省の新人教育を見事にいい得ている。

大蔵省内部では、新人生達の事を“ローカ・トンビ”と呼んでいる。

文書発送、コピー取りなどで省内の廊下を飛び歩くからだ。

2年目までは、見習い期間で全体的な仕事内容を覚えさせられるのである。

そして、国会が始まると“ローカ・トンビ”達はがぜん忙しくなる。

国会議員の「質問取り」という重要な任務を与えられるからである。

本会議や委員会で、与野党、特に野党の議員がどんな質問をするのか、的確にキャッチし

てこななければならない。

さもないと、国会の場で大臣をはじめとする大蔵省幹部が恥をかく事にもなりかねない。

この新人教育でもう一つユニークな事は必ず、一年先輩の大蔵官僚が教授役に就き、“マンツーマン”で全ての面倒を見てくれる事である。

一年生は仕事だけでなく、入省して初めての給料を貰うまでは、この教授役の先輩に昼飯や飲み食いの払いまでおごってもらう権利が有るほどだ。

そしてやがて1年間の過ぎると、今度は逆の立場になって、後輩官僚に、かつて自分が伝授されたように、「大蔵官僚とは…」と、エリート官僚の生き方を語るのである。

世に“大蔵一家”といわれる団結力の強さはこうした環境の中で育つのである。

2 - 3 若殿研修

“ローカ・トンビ”を通過し、大蔵省の大まかな仕事を覚えた3年目になると、同期生たちは2つのコースに分けられる。

「海外留学組」と「国内組」である。

国内組は更に2チームに分かれて「経済理論研修組」と「国税局調査官組」に分類される。海外留学組の約半分は「国費留学」である。

この、「国費留学制度」とは、41年に発足し、各省庁から選ばれた2,3名が2年間留学できるというもので、大蔵省も毎年、3,4名の優秀生を送り込んでる。

一方、その間、国内に残った同期キャリアは、1年交代で「経済理論研修」と「国税調査官」を経験する。

経済理論研修は、毎年7月に開始され翌年の3月までであり、この時期は大蔵省にとってちょうど予算編成期と重なり1年間のうちで最も忙しい時期だが、研修生は一切、仕事に手を付けない。

この制度は43年に故村上考太郎が事務次官に就任した時、「これからの大蔵官僚は、大学で習った程度の知識では駄目だ、もっと高度の理論が必要」との主旨でつくられたもので、ここで彼らは、自分達の仕事の目的がノンキャリアとは違う事を認識させられ、特権階級としての“頂上意識を”植え付けられる。

また、国税調査官となったチームは、いわゆるGメンとして、全国11ヶ所ある国税局に派遣される。

大蔵省の2大権限である税の「徴収」と「分配」、さらには支配構造の大きさを自分の目で確かめるのである。

しかし、海外留学組は、このいずれも経験しないで2年間みっちり勉強に精進するのである。

言うまでもなく優等生は海外組に多い。

この時期を終えると入省5年目、ストレートで入賞すれば27歳という年齢だ。

いよいよこれからキャリアのキャリアらしい仕事に就く。

最初に待っているポストは主任係長。

ノンキャリアと区別するために「主任」の2文字が入っている。

もちろん部下も付き、期間は2年間である。

そして、入省7年目、大蔵式“帝王学”の最後の総仕上げといわれる“若殿研修”がやって来る。

弱冠29, 30歳で地方の税務署長に就任するのだ。

どこの地方税務署に行けば出世コースというものはないが、あくまでも帝王学の総仕上げであるから“若殿”に傷が付かない無難な所にまわされる。

税務署の大きさをA、B、C、Dとランク付ければ、若殿研修はBの下かCの上に赴任させられるのである。

大蔵官僚達は、この税務署長時代を“大名生活”だったと誰もが懐かしむ。

それもそのはずだろう、年は若いといっても“一国一城の主”、ましてや本省から派遣された“代官”である。

やがて本省に戻ってくれば、地方税務署長の手の届かない“雲上人”になる事も保障されている。

その権力者の前で誰もがかきずいたはずである。

こんなことをやっていれば自分が偉くなったと勘違いしてもしょうがない。

この1年間の著長就任は、大蔵式エリート教育のそれなりの絶妙なシステムなのだ。

彼らはここで“エリート”とはいかなるものか、いかに気持ちの良いものであるかをハダで教え込まれるのである。

赴任した若き大蔵官僚達は、そこで地元の財界、農協幹部、法人会、青色申告会などから

「これが地酒です」、「これが産地の名物です」と差し出され、連日、宴会の日々が続く。

むろん、「若殿」は地元の年配の名士より上座につく事になる。

そして、酒豪になる事もエリート教育の一環であり、本省に戻りポストがあがれば、いやがおうでも“政治”との付き合いが多くなる。

飲んで前後不覚になるようでは統治官僚にはなれない。

そのための訓練をここでやっているのだ。

たとえ万が一、“若殿”が失敗するような事があったとしても、それは失敗にならない様に出来ている。

若殿には常に有能な部下が1人付き添い、それをカバーするからだ。

部下といっても、地元では名士の1人に数えられる税務署の総務課長である。

そのため、この総務課長は、次期署長の椅子が約束されている。

だから“若殿”には絶対失敗がおこらないようなシステムに出来ているのだ。

まさに巧妙な人事体系と言ってもいいだろう。

第3章 大蔵官僚の憂鬱

3 - 1 . 頭脳よりも体力勝負

“働きバチ”といわれる大蔵官僚。

例えば3ヶ月間、1日の休みも無く仕事をする。

あるいは3日連続で徹夜仕事をする。

そんな事が予算編成期の大蔵省では当たり前であり、当然、肉体も精神も疲労する。

家族には不満が蓄積する。

それに耐え、慣れ、克服する事もエリート官僚の条件である。

だが、過酷なラットレースから脱落した者には、離婚、ノイローゼ、自殺といった悲惨な影が忍び寄るのである。

まず、世間では、役人仕事振りを語る時「休まず、遅刻せず、働かず」といった、“三す主義”を挙げる人が多い。

だが、これは、われわれ庶民と接する機会の多い地方公務員達の話であって、霞ヶ関の中央官庁で働くエリート官僚においては、大いなる誤解だと言わねばならない。

試しに夜遅く、霞ヶ関の官庁街を歩いて見るといい。

深夜でも煌々と灯がもれ、異常ともいえる滅私奉公で働いているのが分かる。

特に国家の全予算を編成し、“花の主計官僚”といわれる大蔵省の主計官僚にいたっては、全員がモーレツな“働きバチ集団”といってよい。

早い話が、残業時間を見れば、即座に納得がいく。

予算編成期（9月～1月下旬）における月平均の残業時間が240時間！！という凄まじさである。

具体的に言えば、予算編成時は休みが無いので、月30日働いたとして、1日あたり8時間の残業であり、通常の勤務時間が8時間だから、1日あたり計16時間も働いていることになる。

もちろんこれは他省庁と比較してもダントツの多さだ。

ここでは、予算編成のプロセスを追いながら、その主計官僚達のモーレツな仕事ぶりが、家族や日常生活にどのような影響を与えているか見ていきたい。

一口に予算編成と言っても、それが出来上がるまでには、様々な段階がある。

実質的に予算編成の活動が始まるのは、毎年9月1日からであり、各省庁は前日までに翌年度の概算要求を提出している。

まず、9月から10月にかけては「ヒヤリング」と称する、各省庁の担当者からの説明が開始され、忙しくなるのは、10月の声を聞いてからである。

そして、10月に入ると、主計官の家庭は“母子家庭”と化し、深夜に帰宅してすぐに床に入り、朝食をごちそうになって、すぐに登庁する毎日が続くため、自宅がまるで“1食付の下宿屋”となる。

登庁時間は大体が9時30分であり、いくら深夜2時、3時まで仕事をして、翌日は全員が顔を揃える10時30分までには、席についていなければならない。

午前中、要求官庁の担当者からの説明を聞いている間にも、ひっきりなしに内線の電話が鳴り、その相手は相手官庁の幹部であったり、他部局の同僚からの問い合わせがきたりする。

それをさばきながら、1項目、1項目の予算を検討していき、その作業が約2時間ぐらい続く。

昼食時になるが、10月の初めの頃は、それでもまだ同僚達と外へ昼食に出かける事も出来るが、中旬頃になると、仕事の切れ目がなくなり、出前のテナヤ物を食べながら書類に目を通す。

運動不足はもちろんのこと、カロリー過多となるため、1シーズン平均して5キロは太る

という。

主計局が別名“プロイラー養成所”と呼ばれるのはこの為である。

主家局員の間で“魔の編成期”と呼ばれるのは、大蔵原案として新聞紙上で発表される頃である。

通常は12月20日前後で、それに合わせて12月に入ってから、睡眠4～5時間の超過密スケジュールが始まる。

その大蔵原案が発表されたその日に、主計官、主査の最前線部隊はもちろん、主計局の何人かが、ボストンバックに1週間分の下着類を詰めて登庁してくる。

つまり、不眠不休の臨戦態勢が敷かれるのだ。

3日続きの徹夜なんてザラになるので、四十路を過ぎた主計官達にはこたえる。

あちこちの関節がにわかに痛み始め、意識はモーローとしてくる。

数字こそ間違わないが、幹事のアテ字が多くなるという。

こんな苛酷な仕事をこなす大蔵官僚達のために、大蔵省の地下1階には「大蔵温泉」という風呂まであり、さらに1階には仮眠室まであるのだ。

最初、地下にあったこの仮眠室だが、仕事で疲れきった大蔵官僚達がゴロ寝している姿が、ちょうど病院の安置室を連想させ、誰言うところなく“霊安室”と名づけられた。

しかしそれはあまりにもブラックユーモア過ぎるという事で、1階に移ってからは、「ホテル大蔵（オークラ）」と呼ばれるようになったのである。

しかし、大蔵原案の内示が近づくとつれ、この“ホテル大蔵”ですら、満員となる。

あぶれた局員のために、主計局の部屋に設置されている折りたたみ式の簡易ベットがある。ここに毛布を重ねて敷き、ウイスキーを睡眠薬代わりに飲んで寝るそうである。

そして、次の復活折衝が始まると、これはいわば、予算合戦のクライマックスであるだけに各省からの猛攻が開始される。

初めは担当の課長クラス、次に局長、次官とだんだん大物が出てくる。

迎え撃つ主計軍団も、相手によって、“玉”を選ぶ。

主計官が対応するのは局長クラスまでで、課長ポストの主計官に他省の次長、局長がまるで米ツキバツタのように頭を下げる。

主計官が“花の官僚”といわれるのはこの為である。

そして、相手方が次官や大臣を繰り出すと、主計局の方も次長、局長、次官の順に出陣していく。

復活折衝が続く1週間ばかりの間、主計局員達は、それこそ大将同士の一騎打ちを見る思いで待機している。

1ヶ所修正されると、連鎖的に48ヶ所が書き換えられるという予算書であるため、折衝の一言一言が主計局員にはね返る。

寝不足が続き、イラ立ち、つい女子職員などへの言葉遣いが荒れてくる。

そういう時のため、という訳でもなかるうが、主計官と共に最前線に立つ主査を拝命する時に、部外秘の小冊子が渡される。

いわば予算折衝のための便利帳だが、その中身は以下の通りである。

- 1、 いばっちゃいけない(相手はポストに敬礼だ心しよう)。
- 2、 おこっちゃいけない(相手の立場を理解しよう)。
- 3、 甘くなっちゃいけない(相手の要求を見極めよう)。
- 4、 上を向いちゃいけない(相手を説得しよう)。
- 5、 辛くなっちゃいけない(査定はスジを通そう)。
- 6、 まるく入れちゃいけない(査定は積み上げよう)。
- 7、 独断専行しちゃいけない(横の連絡、上司の決裁注意しよう)。
- 8、 ルーズにしちゃいけない(念には念を入れ整理しよう)。
- 9、 嫌われちゃいけない(身を慎もう)。
- 10、 遅くなっちゃいけない(仕事は期日内、時間内、工夫しよう)。

超エリートの大蔵官僚にいまさらと思うが、それだけ予算編成は異常な精神状態になりがちだ、という事なのだろう。

どんなに眠くても、どんなに苛立っても、いつも顔は笑っている。

それでこそ“花の主計官”なのである。

しかし、このような異常なまでの労働環境により、当然、家庭は犠牲となり、家庭サービスなど望むべくも無い。

時として、主査の奥さんが、夫がいない寂しさから神経衰弱になり、「夫を返して下さい！」と直訴しに来たり、あるいは、子供が受験勉強中の大事な時に、父親が相談相手になってやる事も出来ず、家庭内暴力児になった子供もいるらしい。

こういった家族の問題は、主計官僚の誰もが持っていると考えられる。

また、家庭内だけでなく、官僚自身の中にもノイローゼになったり、妻や子供に暴力を振るう者もいるという事だ。

ちなみに、父親が大蔵官僚であった僕の友人の話では、この様な問題は現実らしく、又、幼い頃に父親と遊んだ記憶も皆無だそうである。

だから自分は絶対、親父の様な官僚にはならないと言っていた。

3 - 2 . 離婚の大蔵省

この“夫不在の家庭”は時として、家庭の危機、夫婦の離婚といった結末を招く場合もある。

大蔵官僚の離婚の実態は、プライベートな問題であるため、省内で調査している訳ではない。

広報課でも「離婚がそれほど多いとは思わない」という。

ところが、英国の経済誌「ユーロマネー」の特派員で、ステファン・ブロンテという記者が「大蔵官僚私生活残酷物語」と銘打って、この離婚に関して、次のように述べているのだ。

「・・・・・・・・大蔵官僚が仕事で受けている緊張は、時には家庭生活での犠牲を伴う。(中略)大蔵官僚の離婚率はクラスにも寄るが、5～10%と推定され、これは全国平均の50～100倍である。しかし、家庭生活がどんなに不幸を経験してしようと、大蔵官僚はめったにそれを表さないし、省内の仕事にも影響させる事はない」

このレポートは、当時、官庁内外でも話題になり、“離婚の大蔵”と噂になった。

例えば、34年入省組みでみると、同期生19名のうち2名が離婚しており、率にすると10%強である。

もちろん離婚の無い年次もあるが、1人、2人というのは珍しくなく、それに大蔵省では仕事ですべてが判断されるので、離婚といった私生活の問題は、人事考課に入っていない。むしろ、病気やノイローゼよりは、まだという意見さえある。

それにしてもどうして離婚率が高いのであろうか？

実は高級官僚とは名ばかりで、若い頃は月給も安い。

そんな生活で亭主は毎晩、午前様。

たまの日曜日寝てばかりで、妻とゆっくり話す時間も無い。

しかも、女房側はチヤホヤされて育ったお嬢さんが多いので、すぐ欲求不満になり、「私よりも仕事が大なのね！」とヒステリー状態。

ある主査などは、それを避けるために奥さんを働きに出したら、仕事が面白くなって離婚したというケースもあるようだ。

又、大蔵官僚の妻達の不倫も深く、静かに潜行しているそうである。

3 - 3 . ノイローゼの影も忍び寄る

1ヶ月の超過勤務時間が平均240時間、1日あたりにすると10時間以上の残業となる。しかも3日間ぐらいの連日徹夜はザラとなると、これはもう異常な仕事ぶりという他はない。

そこで伝わってくるのが、大蔵官僚の自殺や、ノイローゼの話だ。

新宿副都心総合クリニックでは、患者の3割が霞ヶ関から来診に来る官僚で、うち3割がノイローゼ状態だそうである。

そして、診察室に入ってきた役人の中でも、大蔵官僚は一見して分かるそうである。

というのも、目立って顔色が悪く、それに話していると「オレは大蔵官僚だ」と何度もつぶやくらしい。

最近、とみに増えているのが、心因性のインポテンツであり、それも30歳を過ぎたばかりの人に多く出ているようだ。

そこから判断しても、大蔵官僚というものがいかにプレッシャーのかかる、ハードな仕事か想像がつくというものだ。

また、大蔵省内にも診療所があり、1日平均110人の患者が訪れる。

病名のベスト3は高血圧、高脂血症、胃・十二指腸潰瘍であり、このストレス病といわれる胃・十二指腸潰瘍が多い事は、いかに仕事がきついかを伺わせる。

ストレスが過剰になるとノイローゼという症状になる事はよく知られている。

大蔵官僚の中に、このノイローゼ状態に陥っている者も少なくはないはずである。

しかし、精神病関係の実態は掴めない。

離婚などの場合は、それが将来の昇進に直接的に関わる事はないが、ノイローゼ等の症状は、すぐに仕事に影響し人事考課にはねかえるからだ。

ちなみに、人事院が毎年発表している「健康安全管理会報」の最新の統計を見ても、精神

病の実数は見当たらない。

ただ、異常ぶりが伺えると思うのは、大蔵官僚の病死者が他の省庁のそれと比べて多い事である。

以下の表を見て頂ければ分かるように、“自殺率”が高いのも大蔵省の異常現象として知られている。

死因別に見る死亡率の比較< 人事院月報を元に作成 >

順位 対象	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
大蔵省職員	ガン 36.4%	心臓病 18.2%	自殺！！ 9.9%	不慮の事故 9.1%	脳卒中 4.5%
国家公務員	ガン 39.2%	脳卒中 12.9%	心臓病 11.4%	不慮の事故 8.3%	自殺 7.3%
民間企業職員	ガン 38.3%	心臓病 15.1%	脳卒中 12.1%	不慮の事故 10.3%	自殺 7.5%
国民全体	ガン 32.2%	脳卒中 16.0%	心臓病 11.5%	不慮の事故 8.1%	自殺 7.5%

昭和52年には主計局のキャリアが1人自殺している。

40年入省組の主計局主査秋田典昭（当時34歳）が深夜自宅で自殺したのである。

彼は東大経済学部を卒業し、上級試験をトップクラスでパスした秀才。

大蔵省に入ると主税畑を歩き、その間にドイツに国費留学し、49年から3年間は西ドイツの日本大使館勤務。

52年7月に帰国し、主計局の防衛一係の担当主査となったが、その年の11月27日、自ら命を絶った。

彼は外国での遅れを取り戻すために働きすぎて、ノイローゼ気味だったともいわれている。

その1年前、大蔵省では、証券局の総務課長心得にいた森源二郎（当時29歳）も自殺しており、庁舎の屋上から飛び降りて死ぬという悲惨さだった。

彼もノイローゼによる自殺といわれている。

昭和56年度以降は、自殺による志望は出ていなかったのだが、ここ数年間の大蔵省に対する東京地検特捜部の追求などにより、官舎内で自ら命を絶つものが続出した。

だが、それにしても、大蔵官僚のエリート官僚達は、何故にこの様な悲劇を招くほどのハードな仕事を展開するのか。

彼らを異常な“働きバチ”に駆り立てているものは何なのか。

それは、公にいえば、自分達が天下国家のカジ取り役であるという使命感。

自分達がやらなければ“明日の日本”が無いといった、国家官僚としての使命感であろう。

しかし、無論それだけでは、これ程までに働く事もない。

つまり、東大法学部、大蔵官僚といったエリートコースをひた走ってきたものが持つ一流意識。

常にトップにいなければ自分の存在意義が亡くなってしまうという不安感、そういったものがあると思う。

言い換えれば私的な出世志向。

より多くの仕事をして認められたい、少しでもトップの座に近づきたいという気持ちが、必死に競争に駆り立てるのである。

いつもトップを目指して昇っていかなければ堕ちてしまうといった、“アリ地獄”的な気持ち、エリートであるがゆえに強いのも事実である。

ここまで述べてきたように大蔵省主計局は、特に東大法学部出身のエリート官僚で固められている所であり、学歴も頭脳も同じとなれば、あとは仕事の量で自分の存在を示すしかない。

人よりも一歩先んじたいと思うのならば、残業に残業を重ね、沢山仕事をするしかない。結局最後は、体力勝負なのである。

その出世競争に敗れた者が悲劇の末路としてたどるのが、ノイローゼであり自殺という事なのだ。

世間から“花の大蔵官僚”といわれる栄光の裏には、こういった“陰”の部分がある事も事実なのである。

第4章 気になる官僚の懐

4 - 1 . 果たして安月給か？

では、気になる官僚達のサラリーであるが、実際のところエリート官僚のサラリーはいかほどなのだろうか。

よく、官僚達はその給与の安さをやたらと強調するが、果たしてそうであろうか？

たし最初のうちは昇給ペースも遅いかもしれないが、40歳頃に本省庁の課長になれば、年収は1000万を超える。

40代後半になって、中2階と呼ばれる審議官に昇格すると、俸給表もそれまでの「行政職」から「指定職」に変わり、民間でいえば役員待遇となる。

基本給も一挙に8割近く上がって、78万5000円になる。

本省課長の給与モデル（45歳、妻と子供2人、東京在住）

級号俸	俸給支給額	扶養手当	俸給の特別調整額	調整手当	住居手当	通勤手当	給与総支給額
11-2	430,900	27,000	107,725	67,875	27,000	45,000	705,500

注) =妻 16,000 + 子2 (5,500 × 2) = × 25%、 = (+ +) × 12% (地域手当、上限)

・ 期末手当 (ボーナス) = (+ +) × 5 . 2ヶ月 =2,941,250 / 年
11,407,250 ・ 年収

これでやっと民間に追いつくといわれ、局長クラスになると民間を超える。

ちなみに、局次長で1380万円、局長で1800万円の年収となる。

しかし、そこまで到達するのは同期入省組のうちほんの数人だ。

エリート官僚の頂点の事務次官は、年収で2500万になり、退職金は、局長で6000万円、事務次官で8000万円にもなるのである。

課長で勇退する人と比べれば、退職金だけでも倍以上の開きが出るのだ。

官僚が出世に目の色を変え、経歴に傷がつくのを恐れて責任回避に汲々とする理由の一端が伺える。

キャリア組は昇り詰めれば高給取り

職務	局次長	局次長	局次長	局長	局長	局長・審議官	次官
年齢	50 (指4)	51 (指5)	52 (指6)	53 (指7)	54 (指7)	55 (指9)	56 (指7)
俸給月額	785,000	846,000	910,000	992,000	992,000	1,151,000	1,304,000

局長になれなかったものは勇退し、特殊法人や関連団体に天下る。

住専に天下った大蔵官僚が億単位の退職金を手にしていた事は、未だ記憶に新しい。

局長以上の天下りはもっと高額な給料を手にする。

その後3年ごとに“渡り”を続ければ、公務員時代の30年分の年収総額を10数年で稼ぐ事が出来るのだ。

ここで、現役時代は事務次官という最高ポストまでに昇りつめ、退官後は、さくら銀行に天下り、

さらには日銀総裁にまでなった松下康雄のケースを見てみよう。

ちなみに、網かけがしてある49年は、彼の給与体系が「行政職」から「指定職」へと変わった年である。

大蔵キャリア官僚モデル賃金 松下康雄 元日銀総裁大蔵省時代

年度	年齢	役職	月給(本給)	ボーナス	年収
昭和25年	24歳	入省 銀行局	4,223	21,115	80,791
26年	25		5,700	28,500	109,212
27年	26	フルブライト留学生	6,900	34,500	117,300
28年	27	銀行局金融制度調査部	9,250	46,250	177,230
29年	28		11,200	56,800	215,432
30年	29	笠岡税務署長	11,600	58,600	272,256
31年	30	泉大津税務署長	12,350	61,750	236,626
32年	31	国税庁査察課長補佐	20,300	101,500	388,948
33年	32	国税庁査察課長補佐	21,400	107,000	410,024

年	3 4	3 3	主税局調査課課長補佐	3 1 , 3 0 0	1 5 6 , 5 0 0	5 9 9 , 7 0 8
年	3 5	3 4	主税局調査課課長補佐	4 1 , 0 0 0	2 0 5 , 0 0 0	7 8 5 , 5 6 0
年	3 6	3 5	主税局調査課課長補佐	4 6 , 3 0 0	2 3 1 , 5 0 0	8 8 7 , 1 0 8
年	3 7	3 6	大臣官房文書課課長補佐	4 8 , 7 0 0	2 4 3 , 5 0 0	9 3 3 , 0 9 2
年	3 8	3 7	大臣官房文書課課長補佐	5 3 , 9 0 0	2 6 9 , 5 0 0	1 , 0 3 2 , 7 2 4
年	3 9	3 8	主計官補佐	6 0 , 1 0 0	3 0 0 , 5 0 0	1 , 9 0 5 , 1 7 6
年	4 0	3 9	主計官補佐	6 2 , 0 0 0	3 1 0 , 0 0 0	1 , 9 6 5 , 4 0 0
年	4 1	4 0	大臣官房秘書官事務取扱	6 4 , 0 0 0	3 2 0 , 0 0 0	1 , 0 8 8 , 0 0 0
年	4 2	4 1	大臣官房秘書官	7 2 , 0 0 0	3 6 0 , 0 0 0	1 , 2 2 4 , 0 0 0
年	4 3	4 2	主計官	8 0 , 0 0 0	4 0 0 , 0 0 0	1 , 3 6 0 , 0 0 0
年	4 4	4 3	主計官	9 1 , 0 0 0	4 5 5 , 0 0 0	1 , 5 4 7 , 0 0 0
年	4 5	4 4	主計官	1 0 7 , 5 0 0	5 3 7 , 5 0 0	1 , 8 2 9 , 5 0 0
年	4 6	4 5	銀行局銀行課長	1 2 6 , 9 0 0	6 3 4 , 5 0 0	2 , 1 8 7 , 3 0 0
年	4 7	4 6	大臣官房秘書課長	1 4 4 , 4 0 0	7 2 2 , 0 0 0	2 , 4 5 4 , 8 0 0
年	4 8	4 7	大臣官房秘書課長	1 7 0 , 9 0 0	8 5 4 , 5 0 0	2 , 9 0 5 , 3 0 0
年	4 9	4 8	近畿財務局長	4 1 0 , 0 0 0	1 , 6 4 0 , 0 0 0	6 , 5 6 0 , 0 0 0
年	5 0	4 9	主計局次長	4 7 0 , 0 0 0	1 , 8 8 0 , 0 0 0	7 , 5 2 0 , 0 0 0
年	5 1	5 0	主計局次長	5 1 2 , 0 0 0	2 , 0 4 8 , 0 0 0	8 , 1 9 2 , 0 0 0
年	5 2	5 1	主計局次長	5 5 7 , 0 0 0	2 , 2 2 8 , 0 0 0	8 , 9 1 2 , 0 0 0
年	5 3	5 2	大蔵大臣官房長	6 0 5 , 0 0 0	2 , 4 2 0 , 0 0 0	9 , 6 8 0 , 0 0 0
年	5 4	5 3	大蔵大臣官房長	6 2 7 , 0 0 0	2 , 5 0 8 , 0 0 0	1 0 , 0 3 2 , 0 0 0
年	5 5	5 4	主計局長	6 7 7 , 0 0 0	2 , 7 0 8 , 0 0 0	1 0 , 8 3 2 , 0 0 0
年	5 6	5 5	主計局長	7 0 8 , 0 0 0	2 , 8 3 2 , 0 0 0	1 1 , 3 2 8 , 0 0 0
年	5 7	5 6	事務次官	9 0 0 , 0 0	3 , 6 0 0 ,	1 4 , 4 0 0 ,

年			0	000	000
58年	57	事務次官	918,000	3,672,000	14,688,000
59年	58	事務次官	949,000		1,898,000
987				年収計	128,701,

退職金 ¥ 59,502,

300

大蔵省時代総合計 ¥ . 188,204,

287!!

上記年収は時間外手当を含む(課長補佐クラスまで。月30時間として計算)。主計官補佐は非常に多忙なため月175時間として計算。

太陽神戸 さくら銀行時代

昭和60年	59歳	浪人時代	
61年	60	太陽神戸銀行取締役就任	23,536,000
62年	61	太陽神戸銀行頭取就任	47,072,000
63年	62	太陽神戸銀行頭取	56,924,000
平成元年	63	太陽神戸銀行頭取	61,004,000
2年	64	太陽神戸三井銀行会長就任	64,112,000
3年	65		78,896,000
4年	66	さくら銀行会長就任	80,228,000
5年	67	さくら銀行会長	77,072,000
6年	68	さくら銀行相談役	38,536,000
000		年収計	52,738,

退職金 ¥ 94,404,000

さくら銀行時代総合計 ￥ . 6 2 1 , 7 8 4 , 0 0

0 ! !

日銀時代

平成6年	68歳	第27代日銀総裁就任	
7年	69歳	日銀総裁	51,330,000
8年	70歳	日銀総裁	51,330,000
9年	71歳	日銀総裁	
年収計			102,660,000

退職金 ￥ . 7 4 , 7 0 0 , 0 0 0

日銀時代総合計 ￥ . 1 7 7 , 3 6 0 , 0 0 0 ! !

しめて9億8734万円!!!!

退官後、現役時には想像もつかないような多額の収入を得て、私腹を肥やしている様子が伺える。

この様に、キャリアは70歳までは天下り先で面倒を見てもらえ、この事が官僚の結束を強める最大の要因の1つといえよう。

こうみてくると、官僚が「人事が万事」をモットーに「細く長く」生きようとしている理由がよく分かる。

晩年こそが収穫期であるからである。

しかし、生涯賃金で見ると民間と比較してどっちが有利という事は一概に判断は下せない。ただ、不況になったからといっても官僚には賃金カットのリスクが無い事は確かである。

4 - 2 . 拝見！官僚の住い

前項で、なんだかんだ薄給等と言いながら、官僚はキッチンと給料を貰っている事は理解してもらえたと思う。

さて、次は気になる官僚のお住いである。

以下の表を見てももらえれば分かるが、例えば64㎡、都内新築のもので彼らが支払う家賃は3万にも満たない。

官僚用マンションの家賃

延べ面積	規格	1㎡あたり基準 使用料(月額)
25㎡未満	a型	2 6 8
25㎡以上 55未満	b型	(円)
55㎡以上 65未満	c型	3 2 9
65㎡以上 80未満	d型	3 7 8
80㎡以上 100未満	e型	4 4 9
100㎡以上		5 6 8

*家賃は例えば、70㎡の住居だとすれば、378×70⇒2万6460円と計算すれば良い。

官僚の多くは、官舎は安普請だ、壁が薄くてプライバシーが無い等と不満を漏らす、それは贅沢というもの。

一般企業に勤めるサラリーマンの大半は東京近郊の同様なマンションに住み、通勤に1時間以上をかけている。

官僚達は又、自分達は老朽化した官舎に住んでいるんだという事を強調する。

しかし、築年別で官舎を見ると、築10年未満が5万戸、10年から20年未満が8万戸、そして20年から30年未満が15万戸となり。老朽化した官舎は一部である事が分かる。しかも建て替えが進んでおり、平成6年の計画ベースによれば、新しく計画した戸数は7486戸。

金額が1200億円だから、1戸当たりの平均単価は1600万円になる。

間違わないで欲しいのは、1600万というのは官舎1棟の建築費ではなく、官舎1戸当たりの建築費用である。

土地代はもちろん含んでいない。

仮に、民間の不動産業者が同様の使用で都内の一等地にマンションを立てれば、億ションとなるのがほとんどではないか。

例えば、千代田区一番町。

皇居を臨む一等地に「一番町住宅」がある。

「一番町住宅」周辺は英国大使館にもほど近く、豪邸が建ち並ぶ超一等地である。

7階建ての住宅は一見すると一世帯の広さは3Kもしくは2LDK程度にしか見えないが、実際には3LDKの広さがある。

間取りを見ると、6畳の部屋が2つ、7.5畳が1つ。

それに16畳という広さの居間。

都内という立地条件なら、決して狭くはないだろう。

この住宅には各階2世帯、合計14世帯の高級官僚がゆったりとした生活を送っている。

家賃はわずか3万円足らずでしかない。

この辺で賃貸となると坪1万2000から3万といった所である。

つまり、一般国民がこの住宅を借りようとする、およそ20坪として最低でも24万円払わなければ借りる事は出来ないの計算になる。

この様な、高級官舎が都内の一等地にゴロゴロしているのである。

仮に官舎の平均家賃を2万5000円と計算し、それに相当する一般的な家賃を安く見積もって10万円として、その差額7万5000円を都内にある官舎5万戸に乗じると、37億5000万円。

つまり都内にある官舎だけで37億5000万円を、我々国民が税金で援助している事になる。

全国には都内の6倍以上、33万戸の官舎があるから、一体どのくらいの援助になるのか見当もつかない。

また、例えば、公務員住宅の家賃とその周辺の賃貸マンションの相場の家賃との開きに注目してみよう。

仮に相場が30万として、公務員住宅の家賃が3万円とするとその差額の27万円は、公務員が受け取る「隠れ給与」になるのだ。

しかもこれには一切税金がかからない給与である。

そう、まさに今、国税庁が課税しようとしている、日銀の豪華な支店長宅がと同じ論理なのだ。

一刻も早く、こうした豪華官舎にも国税庁はそのメスを入れて欲しいものだ。

また、以下の表は公務員の「官舎入居資格」であり、これを見れば分かるように、すでに

キャリアとノンキャリアでは住める官舎に大きな差があるという事だ。

公務員宿舎入居資格

ランク	入居資格	等級	延べ面積	入居者
a	係員 (独身者)	6等級以下	15㎡未満 (寮主体)	ノンキャリア キャリア(国家種合格者)
b	主任係員	6等級以下	15㎡～50㎡未満	
c	課長補佐 係長	3、4、5等級	50㎡～65㎡未満 (2DK～3K)	
d	課長	2等級	65㎡～80㎡未満 (3DK、3LDK)	
e	局次長 部長	指定職及び 1等級	80㎡～100㎡未満 (3LDK、4DK)	
f	局長以上	指定職	100㎡以上 (4LDK以上)	

第5章 新特権階級を狙う大蔵官僚の権力病理

5 - 1 . 華麗なる閥閥

- 「どんな方が、大蔵省のエリート官僚の花嫁候補におなりになるの？」

「一番多いのは実力政治家の令嬢だな、エリート意識の強い大蔵官僚でも、国会審議では代議士諸公にもみくぢんにされる事が多いから、実力政治家を舅に持っておけば、少しはお手柔らかかというところかな」

「その次は、どういうところなの？」

「そうだね、その次となると、実業家の令嬢というところかな、大蔵次官から選挙に打って出ようとすれば、何といても相当な選挙資金を必要とするからね」 (山崎 豊子「華麗なる一族」より)

ここに登場する、美馬中は大蔵省主計局次長。

阪神銀行頭取・万俵大介の娘を妻とし、華麗なる一族につながっている。

大蔵官僚達は、「華麗なる一族なんて、小説や映画の中だけの話ですよ。」と、口を開けば大蔵省の華麗なる閥閥作りを否定する。

だが、そう話す当人達が、実は政治家や有力財界人の娘を妻にしているのだから、相当割り引いて考えなければならない。

日本のエスタブリッシュメントとなるために、今や“タネ馬牧場”と化した大蔵官僚。

その実態が、“血の交配”による閥閥作りだ。

政・財・官の権力パワーが、大蔵官僚を軸に更に新たな強大な権力構造を作り出している。

そのもっとも有効な手段が結婚であり、彼らにとっては権力拡大のための手段でしかない。

いわば、現代に蘇った戦国時代の「政略結婚」そのものである。

具体的な例が、以下の表である。

大蔵官僚と政界との縁戚関係(アイウエオ順)

氏名	入省年	縁戚関係
浅見 敏彦	昭41	元印刷局長、夫人は元総理「鈴木善幸」の二女・和江。
安部 基雄	昭28	元審議官、父が「安倍源基」元内務大臣。民社党衆議院。
池田 行彦	昭36	妻は元総理「池田勇人」の娘・紀子。前総務庁官、衆議院議員
遠藤 胖	昭16	元印刷局長、夫人は元総理「芦田均」の二女・るり
大橋 宗夫	昭31	元日本銀行政策委員会大蔵省代表、父は元労相「大橋武夫」、元昭和電工社長「安西正夫」の娘が妻。
小川 是	昭37	元事務次官、「三治重信」参院議員の長女・裕美子が妻。
越智 通雄	昭27	元主計局調査課長、「福田赳夫」元総理の長女・和子が妻
大野 功統	昭33	元国際金融局国際機構課課長。元衆議院議員「加藤常太郎」の三女・邦子が妻。衆院議員。
加藤 勝信	昭54	周子夫人は「加藤六月」衆院議員の二女。
加藤 秀樹	昭48	東海財務局理財部長。「宮沢弘参」院議員の二女・直子が妻。
岸田 俊輔	昭30	「岸田文武」衆院議員が実兄。元NTT常務。
木村 幸俊	昭47	元外相「木村俊夫」の二女・望子が妻旧姓は金子。元広報室長。
小泉 忠之	昭28	元農相の重政誠之の養子、故河野一郎の長女・明子が妻。
近藤 鉄雄	昭28	元官房調査課課長補佐、夫人は元代議士「野原正勝」の二女・宏子。衆院議員。
迫水 久正	昭30	社会福祉・医療事業団理事。「迫水久常」元郵政相が父。
佐藤 一郎	昭12	元事務次官、元衆院議員、夫人は元厚相「金子庸三」の二女・淳子。
嶋崎 均	昭22	元審議官、築子夫人は「竹下登」元総理夫人直子の妹。前参院議員。
杉崎 重光	昭39	元名古屋国税局長、元大蔵大臣「金子一平」の三女が夫人。
竹内 透	昭37	元国税庁関税部長、妻は元大蔵大臣「村山達雄」の二女・短子。
築柴 勝磨	昭45	元参院議員「斎藤栄三郎」の長女・多摩子が妻。
津島 雄二	昭28	元国税庁法人税課長、「津島文治」の後を継いで衆院議員に。夫人は「太宰治」の長女・園子。
寺内 肇	昭56	玲子夫人が「松本十郎」元防衛庁長官の長女。
寺田 稔	昭55	慶子夫人の祖父が「池田勇人」元総理。
中井 省	昭43	大臣官房審議官銀行局担当。「中井治」前衆院議員が実兄。
中川 雅治	昭44	元主計局給与課長。美穂夫人は「原文兵衛」参院議員の二女。
中山 恭子	昭41	夫は「中山成彬」衆院議員。元理財局国有財産第二課長。
檜崎 泰昌	昭28	郁子夫人は元参院議長「河野謙三」の姪。元北海道開発庁事務次官。
浜田 卓二郎	昭40	元主計局主査、元衆院議員。祖父が「浜田精蔵」元衆院議員。
浜中 秀一郎	昭43	元主計官。「渡部正郎」元衆院議員の二女・美知子が妻。
藤原 和人	昭37	元理財局次長、夫人は元代議士「加藤陽三」の長女・節子。
根元 貞夫	昭40	元代議士「始関伊平」の長女・和子が夫人。
野田 毅	昭39	元理財局課長補佐、元代議士「野田武夫」の長女・みどりが夫人。元衆院議員
牧野 治郎	昭48	元官房企画官。陽子夫人は「牧野隆守」衆院議員の長女。
松谷 明彦	昭45	元主計官、玲子夫人は元総理「福田赳夫」の二女。
増田 信彦	昭25	元審議官、元防衛庁長官「増田甲子七」の娘が妻。
宮沢 喜一	昭17	元通産相秘書官、衆院議員、大蔵大臣。父は「宮沢祐」元衆院議員。
宮沢 洋一	昭49	実兄が「宮沢弘」参院議員、元証券局総務課企画官
村田 吉隆	昭43	元国際金融局調査課長。加代子夫人は「藤井勝志」元衆院議員の長

		女
森田 一	昭32	元総理秘書官。芳子夫人は「大平正芳」元総理の長女。
山本 幸三	昭46	元大蔵相秘書官、夫人は元大蔵大臣「村山達雄」の三女・寛子。

これを見て頂ければ、もはや何も言う事はないだろう。

以前、「ニューパワーエリート」とか「ニューエスタブリッシュメント」といった言葉が、とみに聞かれる時代があった。

意識すれば、“新・特権階級”とでもいうべきモノである。

例えばある権力階級ともう1つの権力階級が閥閥を結び、さらに強固な超権力家系を構築している場合などに使われる。

大蔵官僚が権力構造の中核に位置している事は、これまで既に述べてきた通りであるが、実はその大蔵官僚が、この“新・特権階級”へのキーパーソンの役を担っているという見方がある。

先ず政界との閥閥を試みる事にする。

政治家にとっては、後継者選び、若き大蔵官僚にとっては政界への最短コースである。

この2つの計算が一致したところで、日本最高のエスタブリッシュメントは、更に強大な“特権階級”を生み出して行くのである。

そこには、吉田家、池田家、佐藤家、福田家、大平家、鈴木家といった歴代の首相の名前が次々と登場してくる。

大蔵省OBの池田勇人（大正14年入省）、福田赳夫、大平正芳（同昭和11年）の3人の元首相はいずれも娘婿に大蔵官僚に選び、2世代議士に仕立てている。

福田元首相の場合は、長女ばかりか末娘の婿までが大蔵官僚だ。

大蔵OBではないが、鈴木善幸元首相の娘婿も大蔵官僚であり、ちなみに、この鈴木閥閥の中には、谷村裕（元大蔵事務次官、元東証理事長）、吉国二郎（元大蔵事務次官、元横浜銀行頭取）といった、大蔵省関係者が6名も存在するのである！

いかに、超エスタブリッシュメント集団の中に、大蔵官僚が入り込んでいるのかが良く分かる。

そして、鈴木閥閥よりも更に強大なのが、故大平正芳元総理の閥閥である。

女婿になっているのは、元大蔵官僚の森田一（32年入省・元衆議院議員）である。

彼は、一介の大蔵官僚から、“大平2代目”を受け継ぎ、政治家になったばかりか、現在の日本の最高の閥閥といわれる“超・特権階級”の一員となったのである。

驚く事に、この閥閥をたどると、大正製薬の上原一族、森コンツェルンの森一族、安西一族、さらには住友銀行元会長の堀田一族、日本郵船元社長の浅尾一族にも及んでいる。

又、政界筋では、浜口雄幸、吉田茂、岸信介、佐藤栄作、三木武夫といった総理大臣の家系、あるいは日清製粉の正田栄三郎の正田家、麻生セメント会長の麻生太賀吉の麻生家を通じて、天皇家まで連なっているのである。！！

言い換えれば、この一族は、日本の支配構造の中核である「政・官・財」のトップ層の家系と“血の交配”という何よりも強い絆で連結している事になる。

そのため、この一族が団結して、事を起こそうと思えば、派閥、財閥、学閥で結ばれた以上の強大な“権力”を発揮する事も可能である、と思われる。

恐らく戦前の軍閥や財閥以上の“超・特権閥閥”といっても過言ではあるまい。

今迄、述べてきた様な大蔵官僚が閥閥に組み込まれる背景として、政治家を目指す大蔵官僚にとっては、政治家となる、“三種の神器”である地盤、看板、カバン（金）が苦労なく継承できるため、閥閥を利用した方が合理的となるからである。

どうも、エリート・ファミリーの結婚を見ていると、そこには燃えるような恋のロマンは存在しないようだ。

いやむしろ、上流階級同士は閥閥としての支配権力を拡大する事が第一義であって、庶民のいうロマンなどは愚かしい患者の戯言とでも考えているようだ。

“嫁にやるなら大蔵官僚”というのが、娘を持つ政治家達の願望だと言われるが、これは大蔵官僚こそが、日本の“実権”を握っている事を、政治家自身が一番良く知っているからだろう。

政治とは突き詰めれば「国家の金をどう使うか」に極まるといわれる。

その国家の金を握っているのが他ならぬ大蔵官僚となれば、両者の関係が深まるのは自明の理という事か。

5 - 2 . 財界にまで進出する大蔵官僚

前述の「華麗なる一族」の美馬中が挙げた2つ目のケース、有力財界人の娘と結婚した大蔵官僚も数知れない。

以下の表は、大蔵官僚と、財界・官界との関係である。

大蔵官僚と財界・官界との縁戚関係（アイウエオ順）

氏名	入省年	縁戚関係
猪瀬 義郎	昭22	元理財局長、夫人は元男爵「松平齋光」の娘、元東洋曹達工業社長「岩瀬徳三郎」が父。
五十嵐貞一	昭39	元大阪税関庁、夫人は元全日空会長「若狭徳治」の娘。
石川 光和	昭34	セントラル硝子元社長「吉井幸夫」の娘が夫人。
大槻 章雄	昭26	元関東財務局長。夫人は元日経連会長「大槻文平」の娘。
大須 敏生	昭34	元専売公社総裁「木村秀弘」の娘が夫人。元理財局長。
大蔵 公雄	昭21	元ソニー・プルコ会長、「大橋公望」元満鉄理事が父。夫人は元外務次官「河合達夫」の娘。
大倉 真隆	昭22	元横浜銀行頭取、元事務次官。元大蔵次官で元宝酒造社長「田中豊」の娘・昭子が夫人。
垣水 孝一	昭27	元住宅・都市整備公団副総裁。夫人は一橋大学名誉教授「中山伊知郎」の娘。
柿沢 弘治	昭33	元参事官、夫人は元日銀副総裁「河野通一」の娘。衆院議員。
柏木 祐介	昭16	元財務官、元東京銀行、元東京三菱銀行頭取。明治製糖元社長「相馬敏夫」の娘が夫人。
工藤 振作	昭24	元日本原子力研究所理事。夫人は丸井元会長「青井忠治」の娘。
坂野 常和	昭18	元証券局長、夫人は、元日本化薬会長「原安三郎」の娘。元日本化薬社長
下条進一郎	昭19	元日銀政策委員、元参院議員、元経団連会長「石川一郎」の娘が夫人。父は「下条康磨」元参院議員。
志場喜徳郎	昭17	元証券局長。元東洋曹達工業社長の娘が夫人。
田波 耕治	昭39	現事務次官。横浜銀行元頭取「井原隆一」の娘が夫人。
田村 義雄	昭46	元資源エネルギー庁長官「橋本利一」の娘が夫人。
高橋 英明	昭21	元銀行局長。夫人はハザマ組元社長「神部満之助」の娘。
竹内 克伸	昭39	元関東信越国税局長。夫人は元関税局長「武藤謙二郎」の娘。
津田 広喜	昭47	元北海道拓殖銀行専務「川口嘉一」の娘が夫人。
辻 敬一	昭23	元行政管理庁事務次官。夫人は文化勲章受賞者「荻原祐」の娘、夫婦とも元日銀総裁の孫。
長富祐一郎	昭33	元大蔵財政金融研究所長。富士通元社長「清宮博」の娘が夫人。
鳩山威一郎	昭16	元事務次官、参院議員、夫人はブリジストンタイヤ元会長「石橋正二郎」の娘・安子
原 徹	昭23	元中小企業金融公庫副総裁。夫人は「原吉平」前ジェットロ理事長、ニチポー元社長の娘。
船橋 晴雄	昭44	元在仏日本大使館参事官。夫人は元丸紅会長「檜山宏」の娘。
藤本 進	昭47	トヨタ自動車会長「豊田正一郎」の娘が夫人。
福田 誠	昭43	元運輸次官「中村大造」の娘が夫人。元主計局主計官。
細川 興一	昭45	住友商事元副社長「外山弘」の娘が夫人。元大蔵省主計局調査課長。
松本 十郎	昭17	元印刷局長、元参院議員。元防衛庁長官。夫人は三井銀行会長元会長「佐藤喜一郎」の娘。

松岡 宏	昭30	夫人は元首都高速道路公団理事長「林修三」の娘。
三宅正太郎	昭39	元連合王国大使館公使。鈴与元社長「鈴木要二」の娘が夫。
宮崎 知雄	昭24	元国際金融局長。夫人は元大蔵次官で元宝酒造社長「田中豊」の娘。
村山 久夫	昭33	夫人は三洋電機元会長「井植歳男」の娘、元中小企業金融公庫理事。
武村 敏郎	昭41	大臣官房長。広島銀行頭取「橋口収」の娘が夫人。
吉田 道弘	昭37	元大蔵省関税局担当審議官、丸井元会長「青井忠治」の娘が夫人。
吉国 二郎	昭16	元事務次官、元横浜銀行会長。西本願寺の「後藤宗務」総長の娘が夫人。

その代表格が、元事務次官の鳩山威一郎元参院議員（昭和16年前期入省）であろう。

自身、元首相を父に、元衆院議長を祖父に持つ名門の出であるうえに、ブリジストンタイヤ社長の令嬢を妻に迎えたからだ。

このほか、上記の表にあるように、元三井銀行、東洋曹達（現東ソー）、鹿島建設、三洋電機、富士通、麒麟麦酒など名だたる企業の会長・社長の娘婿が目白押し。

トヨタ財閥も“新・特権階級”になるための、長期的視野に立った先行投資として、娘婿に大蔵官僚を選んでいる。

フランスの人類学者レヴィ・ストロースは、未開社会の婚姻関係を詳しく調べていて、彼らにとって結婚とは、当事者同士の好みとは関係なく、部族間のメッセージの交換であることを指摘している。

大蔵官僚と政財界における閥閥結婚を、これと全く同じだと決め付けるつもりはないが、一見きらびやかな彼らの結婚の形態は、なにやら“支配階級”同士の連帯のメッセージ交換の手段として、利用されているようにも思えてくる。

何故、僕が敢えてこれらの閥閥結婚に批判の目を向けるのは、それらの結婚が一般国民の苦労や生活を全く知らない“特権階級”だけを誕生させ、その結果、支配階級のみの方針や行政を施行するのを危ぶむからである。

又、“省内閥閥”も多い。

吉瀬維哉元事務次官（昭和21年入省）、橋口収元国土庁事務次官（同18年）、松川道哉元財務官（同22年）らの娘をもらったケースだ。

他省庁との閥閥では通産省の高級官僚の娘と結ばれる例が多く、閥閥とは言えないかもしれないが、吉野良彦元事務次官（同28年）の妹は小長啓一元通産事務次官（同28年）の夫人。

又、高木文雄元事務次官と若杉和夫元通産審議官（同28年）はナント、夫人同士が姉妹である。

まさに、華麗なる閨閥だ！

ところで、この様な閨閥作りの世話をしているのが、大蔵省の大臣官房の秘書課長の役目だといわれている。

大蔵官僚達は大学時代には勉強に、入省後は仕事に忙しいために、ろくに女性と付き合う暇も無い。

そこで、秘書課長が人事政策の一環として職員の結婚の世話をするような事態が生じるのである。

名秘書課長と言われた元事務次官の高木文雄は20数組の縁談をまとめたという伝説が残っているくらいだ。

秘書課長は、いわば日本の“特権階級”に大蔵官僚の“タネ馬”を送り込む橋渡し役であり、机の引き出しや、ロッカーに良家のお嬢さんの見合い写真がギッシリと詰まっているとも言われている。

さすがに最近では、学生結婚して入省して来るツワモノや（故新井将敬代議士）恋愛結婚するケースも増えてきているため、見合い写真などは過去の話になりつつあるが、いまだ口頭の依頼はかなり多いようである。

もちろんそうであったとしても最終的には個人的問題である。

だがひとつの権力がもうひとつの権力と重なる事で、さらに大きな権力に広がる事は、若手の大蔵官僚にとってはプラスになる事は確かであろう。

そして、こうして生まれた“新・特権階級”の彼らは、一般国民の苦労や悩みを知らない環境の中で、さらに支配階級の独善の論理を増長させていく事になる。

5 - 3 . 大蔵官僚版「ねるとんパーティー」

こうした上流階級の連結機関としてよく知られているのが、ブルジョア令嬢の“品評会”として有名な「高輪会」というパーティーである。

主催者は、元海上保安庁長官の栃内一彦（元日本航空開発社長）の妻・博子である。

会の名称は、年に6, 7回、東京品川駅前にある高輪プリンスホテルで開催されることから来ており、既に26年目を迎え、これまで200組以上のカップルを誕生させている。

「若い男女の交流と親睦を目的としたもの。だから入会の規則などございませんのよ、紹介者があれば誰でも入れます。」と栃内夫人は言うらしいが、この“紹介”という手続きこ

それが、一般庶民にとっては大きな壁となるのは否めない。

つまり、この「高輪会」は、若きエリート官僚を中心とした、肩書きと身元のしっかりした男性と、政財界の令嬢とを結び付ける、閨閥作りのパーティーなのである。

パーティーは立食形式で、参加費用は5,000円程度。

その演出はあらかじめ選ばれた幹事が担当するが、最近、好評といわれるゲームがある。

“ドッキング・ゲーム”と呼ばれ、会場の真ん中に新聞紙を2枚敷いて、その上に2組のカップルが片足で並んで立つ。

そして、ジャンケンで負けたカップルは新聞紙を半分に折っていく。

新聞紙の面積が狭くなれば必然的に身を寄せ合い抱き合わざるを得ない。

親近感 恋愛 結婚という、思わず笑ってしまう程、あまりに単純な狙いである。

このゲームをやり始めたキッカケが面白い。

初めの頃はダンスが主であったが、エリート官僚達は学生時代のガリ勉の後遺症がここで出てしまうのか、“壁ぎわ族”になってしまう。

令嬢の方はブルジョア家庭に育っている社交家が多く、格差が付きすぎてしまう。

そこで両者にミゾを作ってはいけないと、珍なるこのゲームが考案されたのである。

高輪会に出席した事のある女性達の話によると、出席したのは30代半ばのエリート官僚ばかりで、自己紹介にしても、誰もが“東大法学部”と“エリート官僚”を強調するらしく、大事なおしゃべりに関しても、自分から口を開く事はなく、女性から声を掛けられるまでジッとしているらしい。

いざ話し出しても、内容は現実的で面白味も無い話ばかりで、女性の幸福は、自分達エリート官僚と結婚する事と自慢ばかりしているらしい。

だが、こうしたパーティーから200組以上ものカップルが実際に誕生しているのだから、女性にとってもまんざらではないのである。

この「高輪会」が隆盛なのは、主催者の栃内夫妻の人望もさることながら、この後援者として、大平しげ子夫人(故大平正芳未亡人)、元衆議院議員で大蔵OBの塩崎潤夫人がついているからだといわれている。

この他、閨閥連結機関としては「宏池会」(鈴木派)の議員夫人達の集まりである「満和解」(代表者は故池田勇人の満枝未亡人)。

さらには皇太子と美知子妃を結ばせた「軽井沢会」といった上流階級のサロンもある。

かくして、若き大蔵官僚達は、日本の支配階層に“サラプレットのタネ”を残すために、

閥閥という手段を使って、“新・特権階級”の仲間入りをするのである。

第6章 主要先進国の官僚制

6 - 1 . 勝てば官軍のアメリカ官僚制

まず理解しておいて欲しいのが、アメリカの官僚制は日本のそれとは全然違う形で形成されている事である。

日本のキャリア官僚が、一応、「国家1種」という極めて清潔な試験制度により選抜され、その職を得ているのに対し、アメリカの官僚は、ズバ抜けた実績により迎えられたり、政治党派に対する貢献度により、その職を得ているのである。

つまり、日本の官僚に比べると、アメリカの高級官僚のかなりの部分が、かなり汚らしいプロセスを経て職を得ているのである。

アメリカの場合は、選挙が終わって、政権が交代すると官僚の大移動が始まる。

周知の通り、アメリカの官僚制は猟官制度であり、勝てば官軍、選挙で勝った党派が、官僚を任命する事になっている。

日本の大臣（スゴイ言葉！）に相当する各省長官（正確な訳語を使うと大統領秘書官であり、とても謙虚である）だけは、上院の承認が必要であるが、後は好き勝手に大統領が任命出来るのである。

といっても、「郵便配達のおじさん」までが換えられる訳ではなくて、あくまでも、高級官僚が、その対象となる。

その規模は、3,000人から5,000人と言われているから、日本で言うのならば、キャリア組みのほとんどが職を追われ、新しい党派の人間に換えられてしまう様なものなのだ。

経済的な観点に立つと、弱肉強食の資本主義市場のアメリカで、高級官僚なんてものは、割の合わない商売である。

給料は安く、仕事はきつい、貰えるのは、名誉と箔だけで、こんなモノにはなりたくないよ、と普通の人ならば考えてしまう種類のものだ。

1994年に現在のクリントン政権が組織された時も、クリントン夫妻の弁護士仲間達は、「やだやだ、官僚なんて、やだよー」と言い、ヨーロッパのどこかに身を潜めていたと言う話もある位である。

桁違いに収入が減少するらしいし、色々な所から監視されていて、行儀作法だって良くしなければならない。

歴史の教科書に名前が残る可能性のある長官職ならば話しは別だが、それ以外の高級官僚なんて、敬遠されても不思議は無い類のものなのである。

しかしながら、名誉とか箔だとかいう無形資産は、大概の無形資産がそうであるように、そこに価値を見出そうとする人間にとっては、代え難いものらしい。

そして、高級官僚になりたい人間は、やはり、いっぱい居るのである。

年老いたビジネスマンは、荣誉が欲しいし、若い野心家は、箔を付けたいと考える。

例えば、貿易関係の弁護士ならば、財務省のなんとか官だった、という様な肩書きは価値があるし、ウォールストリートだって、財務省で仕事をしてきた、となると一目を置きたくなる。

少なくともコピー取りはやらせないだろうし、「おうおう、元役人かあ！」と馬鹿にする人間もいっぱい居るけれど、そうでもない人間も少なくはないからだ。

その秀でた能力により三顧の礼をもって迎えられる種類の人間を別にすれば、高級官僚になりたい人間は、大統領の選挙キャンペーンの実働部隊になったり、あるいは政治献金したりして、獵官活動をするのである。

言葉を換えるとアメリカ政府には、かなり変わった種類の野心家が集まり、官僚機構の中心に据えられる、という事である。

大概の人は、目一杯の仕事をして頑張ってしまうので、積極的で攻撃的な政府が出来る事になる。

こんなものは、もしも放置しておいたのならば、時間の経過と共に肥大化するのは当然の事だ。

6 - 2 . 解雇されないファースト・レディー

しかしながら、アメリカ政府の官僚制の良い所は、その「高級」部分が、4年なり、8年なりで一掃されてしまう事だ。

もともと、情報公開制度により秘密が少ない事に重ね、この短期間の交代が、機密主義的「犯行」を防止する。

対立党派の新政権が出来れば、当然の事ながら、過去の悪行を徹底的に暴くからだ。

機密主義が醸造してしまう様な歴史と伝統みたいなものは希薄であり、故に又、省益優先のセクショナリズムも希薄である。

これは、外交分野あたりでは、手練主管に長けた「歴史と伝統の国々」からは馬鹿にされてしまう様な幼稚性を発揮する原因にもなっているけど、この幼稚性による分かり易さは捨て難い。

官僚機構の「高級」部分が、大統領の任命制であるから、解雇が簡単で、人事には柔軟性がある。

仕事に失敗するとか、業績が良くなければ解雇される。

逆に言うと、大統領任命職ではない「生え抜き組」には、重要な仕事は与えられないのである。

大統領の解雇権が及ばないような人間には、重要な権限は委ねない、というのがアメリカの行政機構の伝統である。

ちなみに言えば、だから、ヒラリー夫人が、健保改革のトップに任命された時には、議論を呼んだのだ。

確かに有能な弁護士らしいが、彼女を解雇する事は、なかなか難しいからだ。

彼女は仕事には失敗したが、いまだファースト・レディーの職に就いている。

6 - 3 . アメリカの清潔な役人達

現在のアメリカ政府の官僚機構は日本のそれと比べたら、はるかに清潔であるし、ルールも厳しい。

民間の鶏肉業者によりフットボールのボックスシートに招待された農務長官は、これが露見して、辞任に追い込まれ、しかも特別検事が任命され、きっちりと捜査され、刑事訴追

を受けてしまうくらいの厳しさである。

アメリカの公務員倫理規定法によれば、官僚が、1件\$25、年間\$50以上の贈与を受けた場合には、管理部門に対する報告義務が生じる（ということは、実質的には禁止されているのと同じである）。

昼飯すら、おごってもらふ事は難しいのである！！

接待まみれの日本の官僚と比べ、瓜田に靴を納れず、李下に冠を正さず、という事で、この清潔さは気持ち良いくらいである。

たとえ便宜を図らずとも、なんかを貰えばそれでお仕舞いであるから、分かりやすくて良い。

従って、収賄だとかの汚職事件は殆ど無い。

これは、もちろんFBIなどに代表される、アメリカの強力な警察組織の存在があることも大きいと思われる。

と言っても、行政府の不適切な行動は多々ある。

犯罪を形成するような刑事事件は少ないけれど、政府の行動により、損害を受けたとする「被害者」からの民事訴訟だったのなら、星の数に匹敵するくらい連邦政府は抱えている。アメリカの訴訟制度は行き過ぎだ！との批判は強いけれど、これは泣き寝入りを防止するものになっていて、基本的に悪くないシステムだと僕は考えている。

6 - 4 . 開かれている官僚機構、閉じられているホワイトハウス

アメリカの裁判所における裁定は、その三権分立の制度が有効に働いている例として考える事も出来る。

そして、行政管理機構を牽引するのは、裁判所だけでなくもう1つの権力である議会も又、重要な役割を担っているといえる。

連邦上下各院の各委員会は、各省の監視機構でもあり、その仕事振りをチェックしている。現在の様に、民主党の大統領が統括する行政府、共和党が多数を占める議会、という様な対立があれば、このチェック機能はなおさら厳しく働く。

各委員会の他にも、連邦議会にはGAO (General Accounting Office 一般会計局) というのがあって、ここでは税金の使い方以外にも、行政府の仕事振りの色々をチェックしている。

特に近年においては、書類のほとんどはコンピュータで作られるために、保存・検索・アウトプットが容易であり、何か問題が起きて、議会が調査に乗り出したりすると、重要証拠書類が簡単に出てくる。

行政府内部の通信も、現在では電子メールで、なされるのが普通で、メモの類までも残され、これらもチェックされる。

調査をしている委員会の審議は公開されていて、議会報道の専門局である「C - SPAN」により、生中継で放映されるから、国民もまた行政府の仕事振りを見る事が出来るのである。

三権分立という権力の相互牽制システムが教科書に載っている様な形で実際に働いていて、しかも、政府の大概の行動が公開されている様子は、ここまでやってくれると見事なものだ、と感心さえする位である。

だが、アメリカ政府は国民に開かれている見事な政府なのか？と聞かれるならば、残念ながら、ハハハ！ .. っと笑ってしまう他に無い。

そこまで、アメリカを誉める必要は無いのである。

少なくとも、現在のクリントン政権に関して言えば、秘密だらけである。

ホワイトウォーター疑惑、トラベルゲート疑惑、ファイルゲート疑惑、キャトルゲート疑惑、キャトル・グランデ疑惑、ヴィンセント・フォスター自殺疑惑、メナ飛行場疑惑、モニカ・ルウィンスキー不倫疑惑、という様に、ホワイトハウスの頂上部分では、過去と現在の大統領夫婦の「犯罪」が、様々な隠蔽工作によって閉ざされており、開かれた政権というには、ほど遠い状態にある。

アメリカと言えども、統治者の古典的戦略を踏襲しているのである。

権力を維持する秘訣は、秘密を維持する事。

人々を権力の秘密に近づけない事。

もし、ホワイトハウスの住人達の行動が、多くの人達が望む様に、ガラス張りになるのなら、アメリカ連邦政府は、現在とはまるで違った段階に突き進む事になる。

それが実現されるならば、アメリカは人類を未来に連れて行く事が出来る、と言って良いだろう。

6 - 5 官僚国家フランス

では、アメリカに続いて、「官僚国家」と名高いフランスはどうであろう？

フランスは日本とは比較にならない程、極端な学歴社会であり、これはハンパではない！！

そして、数ある省庁の中でも、大蔵省、大蔵官僚の地位は特に高い。

アメリカでも出身学校によって初任給に差が有るが、いつまでも学歴が物を言う訳ではないというが、フランスでは一生に渡ってかなり物を言うのである

民間企業の採用の広告を見ても、「理工科学校、あるいは中央学校の卒業生を求む」といった風にしてある事すら多い。

このフランスの学歴社会は、日本の様に「東京大学」が全ての分野で優位を占めカリスマ性を持つというのとはかなり違う。

先ず、典型的なエリート・コースは4種類ある。

「学者コース」、「技術官僚（技官）コース」、「事務官僚コース」、「ビジネスマン・コース」であり、彼らの人生観をやや面白く比較すれば、次に掲げた表の様になるう。

成功するとはどういう事か？

	エコール・ノルマル（学者コース）卒業生	ポリテクニク（技術官僚コース）卒業生
結婚	女子高等師範学校卒業生と結婚したい。	お嬢様学校の卒業生と結婚したい。
子供	話し相手になる様な息子が欲しい。	息子にも理工科学校へ入って欲しい。
仕事 1	電話無しで済ませたい。	電話を3本欲しい。
仕事 2	官舎が欲しい。	コンコルドで出張したい。
車	自動車無しで済ませたい。	ルノー25（超高級車）に乗りたい。
出世 1	一流の知識人として認められたい。	ENA出身の部下を持ちたい。
出世 2	60歳でノーベル賞を取りたい。	50歳で大会社の社長になりたい。
出世 3	有名知識人の友達になりたい。	大臣を怒鳴りつけるようになりたい。
余暇	一流出版社の全編纂委員長になりたい。	ゴルフの優勝カップを取りたい。

ENA（事務官僚コース）卒業生		HEC、ESSEC（ビジネスマン・コース）卒業生
結婚	高級官僚の娘と結婚したい。	ファッションモデルと同棲したい。
子供	ENA に息子を入れたい。	息子をハーバードに留学させたい。
仕事 1	大臣へ直接電話できるようになりたい。	自動車電話が欲しい。
仕事 2	公用車があれば良い。	自分専用の社用機が欲しい。
車	白バイ警官の護衛が欲しい。	ポルシェか BMW で飛ばしたい。
出世 1	大会社の社長を役所に呼びつけたい。	経済史の表紙になりたい。
出世 2	40歳で勲章が欲しい。	30歳で億万長者になりたい。
出世 3	首相と俺、お前の仲になりたい。	億万長者とヴァカンスを楽しみたい。
余暇	小説を発表したい。	自分の成功談を人に書かせたい。

この表はアレクサンドル・ラザレフ、ジャン・パスカル・トラニエ「成功への道」掲載の表を日本人に理解しやすい様に手を加えたものである。

いずれもフランスの受験競争の頂点にある。

タイプの違った4つの学校の卒業生達の人生観がやや、誇張されているが、巧妙に対比されている。（なお、エコール・ノルマル（高等師範）はサルトルら有名学者・知識人（理科系も含む）を生んだ大学教授養成学校でパリ大学と連携関係にある。

ポリテクニク（理工科学校）は元来は技術将校養成校だが、現在では技術官僚、技術系経営者を目指すものが殆ど。

ENA は事務系高級官僚養成学校。

HEC、ESSEC は戦前の商科大学の様なビジネス・スクール。

こうした学歴社会を、「フランスは意外に民主的でない」と解釈する人も居るだろうが、フランスの学歴社会は大革命によって樹立された民主的伝統そのものなのである。

日本では「実力主義か学歴社会か」というが、フランスでは「血縁主義が学歴社会か」というが、フランスでは、「血縁主義 = 縁故主義か学歴社会か」という対比が成立する。

フランス社会における学歴の機能のひとつの典型を、公務員の世界に見てみよう。

公務員の世界では、日本においても、どの試験区分によって採用されたかが、それなりの意味を持つし、局長クラスはほとんど「国家1種」試験での採用である。

しかし、彼らの初任ポストはヒラである。

スタートはほとんど同じで、その後の昇進スピードに差があって、上級職だと部長、局長クラスのチャンスがあるが、例えば「国家2種」採用であつたら課長クラスあたり迄が通

常の限度である。

ところが、フランスは違うのである！！

仮に日本の制度に当てはめれば、「国家 3 種」採用の公務員の最終ポストは「国家 2 種」採用の公務員の初任ポストより下だし、「国家 1 種」採用の公務員の初任ポストは「国家 2 種」採用の公務員の最後に到達しうる地位より上なのである。

フランスの公務員制度で日本の事務系上級職公務員（「国家 1 種」採用公務員）にあたるのは、ENA の卒業生である。

フランス版「東京大学法学部」という人もいるが、むしろそのイメージに近いのはパリ政治学院（シアンスポ）で、ENA の入学試験は日本の「国家 1 種」試験にあたる。

採用試験の後日本では各省庁が合格者を独自に採用し、あとは OJT という事になるが、フランスでは 2 年あまりの間、ENA で訓練し、その卒業成績で各官庁へ配属される。

学生（エレーブ）は日本の防衛大学と同じように、公務員としての給料を支給され、公務員として日本の役所の課長補佐程度の扱いを受ける。

そして、この ENA を卒業すると、通常は何々省高等行政官（アドミニストゥラートル・シヴィル）という称号を持ち、だいたい 10 年足らずで課長（ス・ディレクートル） - 制度が違うので厳密な比較は困難だが、日本の課長よりやや上位か - になる。

それ以後は、個々人でかなり昇進スピードが変わってくるが、日本のように 10 年間も課長クラスでなければ上に行けないという事はなく、かなり短い期間の後、局長クラスになる事もある。

しかし、ENA の卒業成績トップクラスの者は、グランコール（強いて訳せば大官僚団）と呼ばれる国務員（コンセイユ・デタ）、財政監察院、会計監査院のいずれかを選ぶ。

国務院は行政裁判所（戦前は日本でも存在）兼内閣法制局、財政監察院は日本の役所では類似の物無し（総務庁と大蔵省主計局の業務の一部に少し似ている）、会計監査院は日本の物とさほど変わらない。

このうち、国務院はフランスでは第 2 の政府と言っても良い程の権力を持っているが、財政監察院や会計監査院はその本来の業務自体はさほど興味のある物でもない。

楽しみは、こうしたグランコールのメンバーになると、各省の大臣などの官房スタッフになれるチャンスが多い事である。

例えば、ジスカール・デスタン元大統領やロカール元首相は財政監察院、ドブレ元首相、ファビウス元首相は国務院、シラク大統領は会計監査院出身である。

しかし、この ENA 入学には2つの入学試験区分があって、1つは日本の公務員試験と同じく若い学生が20代前半で受験する区分である。

最短コースはリセ（高等学校）卒業後シアンスポで3年学んで、というものであるが、教育制度が日本の様な単線型では無く、複雑な複線タイプなので、もう少し寄り道してくる方が普通である。

もう1つの区分は、公務員を5年以上勤めた者のための特別コースである。

年齢層は20代後半が主体だが、30代の者も多い。

更に、このチャンスを逃しても、もう1度40代で、各省庁の推薦に基づき選考で高等行政官になる道が残されている。

この様に、高等行政官になるには3コースある訳だが、どのコースを取ろうか、高等行政官になった時点から同じ条件で昇進が始まる訳である。

6 - 2 . エリートを生む制度

こうした制度はフランスの公務員の世界では必ず存在して、例えば小学校の先生が中学校の先生になるというような場合にも、これと良く似た仕組みが存在しているのである。

つまり、公職について昇進について、縁故とか情実による事なく、客観的な基準による事こそが民主的であるというのがフランスの考え方なのである。

逆に言えば、アメリカのようにかなりの公務員のポストを選挙で決めたり、あるいは選挙で勝った方が政治的に任命できるようなシステムは、西部劇の延長の野蛮な仕組みだという事になるのである。

こうした考え方は、伝統的にどちらかというと進歩的、ないしは、革新的な人々によってより強く支持されてきた。

だから、ENA の仕組みにしても、より縁故主義的な色彩が強かった戦前の公務員採用システムに替えて、戦争直後のドゴール臨時政権もとで、共産党も含めた左翼陣営の強い支持を受けて採用された物である。

日本では未だ、左翼的な人々の方が公的なエリート教育を嫌う傾向がある。

しかし、それだと高度な教育を受けうるのは、経済的に恵まれた層の出身者に限られてしまう。

そこで、能力に応じた教育を公的に行う事によって、出身階層とか縁故ではなく、能力と

努力によってそれに相応しい職業や地位を得る事が出来るようにすべきだ、というのがフランス革命以来の進歩派の伝統なのである。(もちろん保守、革新をとわずエリート主義の行き過ぎを指摘する人達は、ジャコバン政権以来、常に存在する。)

そうは言っても、日本と同様に良い学校に入るためには、親の経済力とか知的レベルがものが潜在的な能力より、到達した完成度を見る傾向がある事、そうした矛盾をより拡大しているのも事実である。

日本でしばしば誤解されているように、例えば ENA の学生のほとんどが、18世紀以来の名門出身だというような事はありえない。

ごく平凡な農民の子供でも、師範学校 - 戦前の日本と良く似た制度で、リセと同程度で授業料無料、給与を支給 - に入って小学校の先生になる事は出来る。

そして、その子供は教育熱心な親の導きで何にでもなれるというのが、戦前から云われて来たのである。

例えばシラク首相の曽祖父はオーヴェルニュの農民であり、祖父は小学校の校長先生で父親はほどほどに成功した実業家だったが、これなど典型的なサクセス・ストーリーである。しかも、近年はフランス社会全体の中流化の進展で進学率が上がり、このため小学校の先生というようなワンクッション入れずとも、その気になれば1世代でソーシャル・ラダーを駆け上がる事も可能になってきたようである。

この様なシステムは、高等教育を受けた層だけに限られる物ではない。

例えば、料理の世界では、ミシュラン等のガイドブックがレストランの格付けをする。

最高の評価である3つ星を得ているレストランは全国で18しかない。

毎年平均すれば、1つずつ入れ替わっている程度だが、ここでどういう評価をされるかで名誉も収入も決まると言っても過言ではない。

だから暖簾等という物はほとんど意味が無い。

これがフランス人の考える民主主義なのだ。

この点に付いて日本人とフランス人の考え方を感じさせる場面に出会ったのは、あるデパートの食品売り場で、「150年の老舗の味」という張り紙をポール・ボキューズのお惣菜コーナーで発見した時である。

ポール・ボキューズといえ、3つ星レストランのシェフの中でも、20世紀後半を代表する料理人の1人といわれている名シェフだが、そのシェフの価値が、彼の祖先であるリヨンの郊外で小さなレストラン兼旅籠屋を始めた時からの時間の長さで評価されるとは本

人も呆れ返るであろう。

ちなみに、フランスの大蔵省はルーブル美術館のある旧ルーブル宮殿の一角にあって、ある旧ルーブル宮殿の一角にあって、その地位の高さを象徴している。

フランスの大蔵官僚は宮殿の中で執務をするのだ！

日本人観光客などはルーブル美術館と勘違いして、よく大蔵省の玄関にやって来て、追いつ返されるが、入り口こそ違え同じ建物にあるのだから、旅行者の無知ばかりを責める訳には行かない。

1987年2月にパリで開かれた先進7カ国蔵相・中央銀行総裁会議（G7）による為替安定のための合意を「ルーブル合意」と呼ぶのは、会議がルーブル美術館ではなく、大蔵省で開かれたからである。

第7章 望まれる意識改革

7 - 1 22歳の悲慘な結末

日本において、22歳の才能のある学生が大蔵官僚になりたがるのは悲慘な話だ。

なぜなら、彼ら、あるいは彼女らは、他に選択肢が無いがために官僚になる事を選ぶのではなく、おそらく、同世代の中では、最も多くの選択権を保有しているにもかかわらず、敢えて、官僚になるのだ。

僕には、あたかもそれが自明の論理のように「官僚の仕事なんて、面白いはずが無いよ」という認識がある。

給料も安いし、決して楽な仕事でもなく、しかも、官僚は、現代の社会の嫌われものだ。クリエイティブでもないし、楽しい仕事でもないのに、どうしてこんなものになりたがるのか？

「身を立て名を上げ、やよ励めよ」というような立身出世思想を、現在の22歳の青年が持っているとは僕には思えない。

私たちの「国家」は、立身出世思想が幅を利かせていた時代に持っていたような求心力を、かなり以前に喪失していて、はるかに軽いものになっている。

ゆえにまた、現在の22歳の青年が、社会のため、とか、国家のため、という様な使命感

を抱いていて官僚の職を望むとも、僕には思えない。

面接試験では、その種の事を言う事が有るにしても、そんなものを本音として持っているなんて信じられない。

個を全体に吸い込ませるほど、現在の22歳が、愚かであるとも思えないからだ。

7 - 2 高級ブランドとして的高级官僚

1番妥当であると思われる事を言えば、そこには自己目的化が存在するのだ。

官僚になって、何かを成そうとするのではなくて、官僚になる事自体が目的となっているのである。

それを手に入れる事ができる範囲に自分がいると信じられる人間が、「最高級の榮譽」みたいなものを手に入れようとする、という事。

高級官僚という職業は、22歳の青年にとって、高級ブランドの一種なのだ。

希少性が有り、社会がその価値を認めている、と信じる事が出来るブランドになっている。

それは、流行遅れのファッションなのかもしれないが、ブランドとしての価値はある。

なにしろ、希少性が有って、人々を驚かす事が出来るからだ。

なぜ、希少性が有るのかというと、現在の大衆化された教育システムの中で、選別に選別が重ねられ、最後の選別を通過する事に成功しているからだ。

そこでは希少性は同時に貴種性でもある。

逆の見方をすれば、現在の教育システムは、そのゴールの部分に、官僚機構という変なものをくっつけている、と表現する事も出来るはずである。

要するに、教育システムに、たまたま、官僚機構が接続されている、という考え方だ。

もともとは、日本の近代の高等教育制度は「国家の指導者」たる人材を育成するものとして創出されたのは確かだけど（おお、帝国大学！）現在では、国家は違う種類の国家になっているわけで、官僚機構に、教育システムの選別機能により抽出されたエリートを送り込む必要はない訳だ。

たまたま、という言葉が不適當ならば、歴史的遺物である、といってもいい。

なぜなら、現在では、「国家の指導者」は、選挙で選ばれる事になっているからであり、公務員採用試験などというものに、「国家の指導者」を決定する権限を与えてはいけない、と考えるべきだからである。

終章

いままで、こうして官僚制の事を書いてきたが、7章にも書いたとおり私にはどうも、この官僚というものが、受験社会の延長線上に有るとしか思えない。

いわば、すごろくの「アガリ」のような……

自分が官僚になって、「この国のグランドデザインをしてみたい！」とか、官僚になって「体に障害を持った人にとって優しい町作りをしたい！」とか、少しでも自分を犠牲にしてまで国民に奉仕するという気概を持った人間が、居て欲しいものである。

それよりかは、なにかステイタスとしてこの職を選んだ者が多い気がする。

地方公務員を例にとって見ると、僕の周りでこの職を希望するものがあるが、その大抵の志望動機が「楽できそー！」、「自分の時間が持てそー」などといった、極めて消極的な志望動機を持った者ばかりである。

これらの職業は公僕という名が示すとうり、市民、国民にサービスを積極的に提供する事が仕事であるのに対し、その実状は極めてお寒い限りである。

まあ、地方公務員と比較するのは違うかもしれないが、キャリアのようなテクノクラートの存在は必要である事は認める。

しかし、給料が安いなどとは言わないで欲しい。

当然彼らは、民間企業の方が給与水準が高いという事を承知で今の職を選んだのだろうし、自分の仕事が直接、この国を動かしているとか、今行っている政策が多くの人のために役立っていると実感できる事が、彼らの報酬なのだから。